

高齢運転者の運転の実態と意識に関する調査研究—高齢運転者に関する総合的研究(1)
(昭和 59 年度)

高齢ドライバーの安全確保のための施策が今後の交通安全対策の重要な柱の一つとなることは疑いのないところである。しかし、こうした高齢ドライバーに関する体系的な資料に乏しい現状にかんがみ、高齢ドライバーの運転の実態、運転態度、安全意識など、車とのかかわり合いを広く、かつ具体的に調査し、高齢ドライバーの諸特性を把握した。

- ① アンケートによって調査したものを、統計的手法によって解析し、解析に当たっては、対照するものとして 30 歳代（未満を含む）、40 歳代、50 歳代の各層のものについてもサンプリングを行った。全国 14 都道府県からそれぞれ 320 名、計 4,480 名の運転者を対象とし、有効回収数 3,631 名、うち 60 歳以上の高齢ドライバー 1,000 名のサンプルを得た。
- ② 高齢ドライバーを 60 歳以上として見た場合、その大半は現役ドライバーとして、車社会に積極的に参加しており、特に職業的にその地位を確保していることが判明し、まだまだ、なんらかの社会的生産に関与している事実が明確となった。
- ③ 車の運転を主たる業務とする職種について見ると、加齢とともに軽い作業への移行が見られ、貨物輸送に従事する者が減少し、人員輸送に当る者の減少率が比較的少ないことにより、結果的に人員輸送にたずさわるものの率が大きくなっている。
- ④ 運転頻度について見ると、高齢層においても、その 70%のものがなんらかの形で毎日（週 5 日以上）ハンドルを握っており、これを目的別に見ると 62.3%が仕事中心となっている。
- ⑤ ペーパードライバーは、今回の調査では平均 1.2%であり、高齢層では 2.5%の値を示している。高年齢に達して運転を止めペーパードライバーになった理由としては、「身体が悪くなったので」、「退職にともなって」、「他の者が運転してくれる」が多い。
- ⑥ 高齢ドライバーが普段運転する車種は加齢とともに大型車両や乗用車から軽便な軽乗用車や原付へと移行している。
- ⑦ 高齢ドライバーの運転中の不安感について見ると、加齢による身体運動機能、反射機能の低下を反映して、速い車の流れに乗る場合、進路変更を余儀なくされる場合、狭い道路でのすれ違い等に高いことを挙げる事が出来る（図）。
- ⑧ 車の運転継続意志について見ると、60 歳以上にあっても 76.9%と高率であって、その可能年齢を平均 73.2 歳と見積もっている。
- ⑨ 高齢ドライバーの年間走行距離について見ると、10,000 km未満が 47.7%と半数近くを占め、高齢化に伴い走行距離が減少してくる。また運転行動半径についても、44.1%が 10 km未満で運転行動の狭域化が見られる。

図 運転の不安感に関する年齢別平均点

